

## 佛敎と佛敎藝術

松本文三郎

先年私の巴里に滞在してゐた頃はよく彼地のお寺へ參詣したことがある。私は基督敎徒ではないが、彼の宗敎事情や信仰状態を視察したい爲に、ノートルダム (Notre Dame) を始め其他有名な多くの寺院へ足を運んだ。殊に日曜日などには、遠く郊外へでも遠足しない限りは、街の中では殆ど觀る處もないから、自然お寺へと出掛けたのである。お寺には莊嚴なる儀式が行はれ、加之微妙な音樂が吹奏せられ、恍惚として殆んど我を忘れ、非常に愉快に半日を費し得るのである。足一歩寺院へ入れば、建築の具合で外界の喧噪は全く耳に入らず、恰も別天地の如く靜寂にして、そこ

に莊嚴なる儀式に項を垂れ美妙なる音樂に心を奪はれ、壁間の美はしい繪畫或は巧なる彫刻に接觸した時、吾人は正しく所謂天國へでも生れ出たかの如き氣持がしたのである。今回は伊太利へ行つたのであるが、伊太利は御承知の如く羅馬法王の居られる處で到る處に世界的な立派な敎會堂がある、たとへばフロレンス (Florence) にはドゥオーモ (Duomo) があり、これはサンタマリア (Santa Maria) のカセドラル (Cathedral) である。ベニス (Venice) にはサンマルコといつてベニス市の中心たる處に立派な建築がある。ミラン (Milan) には又ミランのドゥオーモ、カセドラルがある。これも甚だ有名なものである。羅馬は「常住の都」[Eternal City] ともいはれ、澤山な寺院がある。四百以上の

寺院彼此に散在するともいふが、就中七大本山といふのが其最も著しいものである。その中でも殊に法王廳の前にある、サン、ピートロ (S. Pietro) の寺院は最も大きく又最も有名で、恐らく世界中にもならびない宏壯なものであらう。これに St. Peter の墓のあとに造つたものであつて、法王 Sylvester I の請によつて紀元三百年の始め頃 Constantine 大帝が建立したものであるといふ。紀元後八百年にはシャーレマン (Charlemagne) 王が、レオ二世 (Leo III.) から羅馬帝の王冠を受け、此に其の即位の式を擧げた處である。今の建築は勿論當時のもの其儘ではない、此歴史的に有名な建築も時の力には勝たず、次第に破壊したので、其再建にかゝつたのが紀元一四五〇年、工事を進めてゐる間に幾度となくその設計を改變した。さうして全く出来上つたのが一六二六サン、シルベスターの建築の一千三百回忌の時であつた。當時第一流の建築家

が腦漿を絞つて考察を廻らし彼の有名なる畫家ラファエロ (Raffaello Sanzio) や彫刻家ミケルアンゼロ (Michelangelo) 等がこの事業に參與して居かくてその建築諸費、壹千萬磅即ち約壹億圓に上ると傳へらる。今の價格で計算したならば何十億になるか計り知るべからざるものである。其總面積は十六萬二千平方尺、大理石の柱や壁に鏤むるに自然の寶石を以てし、天井には壁畫をえがき、左右には幾多の禮拜堂を設け、彼のモザイクを以て古今の名畫を寫出してある。足一度其中に入れば何人もその莊麗と廣大とに驚かざるを得ないのである。如何にも佛蘭西の寺院に於ける如き微妙な音樂は此に聞き得なかつたが、建築、彫刻、繪畫の雄麗なるに至つては彼よりも更らに一歩を進めてゐるやうに感せられた。新敎の會堂には到底こんな處はなく、寧ろ寂寞たる感を生ずるのみである、これは舊敎の寺院に限るのである。扱お寺

はさうであるが次に一つ予が面白いと思つたのは墓地である。西洋の墓地は頗る綺麗に心地よく出来て居る。ミランの街の西北端に伊太利第一と稱せらるゝ美しい大きな墓地があるが、これも或は世界一であるかも知れぬ。富豪貴顯は此處に立派な建築をなし、死者の記念として居る。或は希臘風のもあれば或はルネッサンス式のもあり、又遠くは埃及のピラミッド式のものといふ風に恰も世界建築の標本を集めたる如き觀がある。又中には石に死者の名を彫り傍に諸種の大理石の彫像を立てゝあるものもある、斯の類のものは最も多い。だから一方からいへば建築の標本展覽會の如く他方よりみれば近代彫刻を集めた美術館の如き觀がある。而して其墓と墓との間には花を植ゑ壇を造り、美しく掃除がしてある。斯かる處ならば死者も永久に又最も安らかに眠ることが出来るであらうと思はれる位綺麗に出来て居る。

それらの有様を見聞して私は宗教と藝術との間には何等か密接な關係があるかの如く、又なくてはならぬやうに感じたのである。藝術のない宗教は誠に索漠としたものではあるまいか、今述べた如き寺院へ足を入れると、たとひ身は基督教徒でなくとも、何となく此に神聖な宗教的氣分が漂ふてくるのである。そこで私は藝術と宗教との關係に就き一般的に一應考へて見たいと思ふ。

## 二

若し藝術なるものが何等か理想の境地を現はし出すものであるならば宗教も亦然りである。否寧ろ宗教こそ實に一大藝術であるといはなければならぬ。普通の用語では時として藝術なる語を自然なる語と相對して用ゐることもある。

如何にも自然の現象の中、美術家はその美しい點のみを擇び取つて之を描き出すのである。この

意味からしては藝術は自然と相對することゝもなり、藝術は藝術家の空想によつて造られた人爲的なものとすることも出来る。果して然らば宗教は自然と藝術との何れに屬するやといふに、自然のものであるらしい。佛經にも述べてある如く、佛法は人間の造つたものでもなく、神の造つたものでもなく、犍闍婆の造つたものでもない。佛敎は佛の發明でなく、發見せられた所である。此點からしては宗教は自然に屬する如くである、が併し藝術をもつと廣義に用ゐることは、世間でも自然の藝術といふことをいふ。美しい花鳥、人力の及ばぬ絶景、人はそれを自然の藝術といふ。是時は自然と藝術とを相對するのではなく、自然に於ても藝術を見出しうるるといふことになるのである。藝術は想像でも出来るが單に空想ではない。自然法に背いた藝術は我等に何等快感を與へない。言を換へていへば、藝術は實にありうべくして凡眼を

以ては發見し得ないものである。藝術は、現にこの俗界に實在し得べくして未だ實在しない美はしいものを現はし出すものともいへる。さすれば自然の藝術といふも、何等の人爲を加へずに宛も理想的の美しく、眞なる状態を現はし出してゐるものとみるべきである。要するにどちらにしても理想の境致を現はしてゐなければ藝術とはいはれぬ假令ひ或物が醜なる方面を持つとしても美術家はそれを美化して考へる。何等か美しい點を此に發見し出すのである、だから自然其物も美術家の眼から見ると美しいものとなる。實はさうありうるものであるが唯凡夫にはさうみえないだけであるその意味からして宗教は絶大の藝術であるといへる。宗教は人をして差別相を超越した理想の極地を獲得せしむるのであるから、一切の矛盾を去り心と身體、自と他、人と世界、彼世と此世といふが如き所有差別相を融合して了ふ。普通理想とい

ふのは一部分の美化であるが、宗教は一切を美化する、此俗界を直ちに黄金世界と變じて了ふ。此點からいへば宗教は絶大の藝術で、これより大なる藝術はない。ショーペンハウアー (Schopenhauer) が吾人が大なる藝術品の前に立つ時は我々を忘れ小我を没して大我に入るといつたが、實に藝術は宗教的境界を瞬間的に得せしむるものである。私が始めに基督教寺院の殿堂に入つて云ふべからざる莊嚴なる感情にうたれ自ら敬虔に額くに至つたといつたのも正しくそれである。併し我々俗人は一度外間へ出づれば忽ちにその氣分を失つて直ちに俗な氣分になつてしまふ。それこそ實に瞬間的である。唯宗教はその心持を永久的にするものであり、全體的にするのである。救濟を得たる所謂悟道者とはその心持の常住現前するものをいふのである。かく考へると其宗教的境界を言語であらせば言々句々亦皆藝術とならなくてはならぬ。

斯く宗教自身既に一大藝術であるから、之に藝術を伴ふのはこれ亦必然の勢ではあるまいか。推して之を論ずれば藝術でなくては宗教はほんどうに表顯し得ないものではなからうか。宗教の眞趣旨をあらはすものは理論ではなくて、寧ろ藝術でなからうか。古來禪僧が悟道の境界を表白するに當り常に詩や歌の如き韻文の形を取るといふのも必ずしも偶然ではない。言語に絶したる境地を表はすには藝術が最も適切であり、又之がなくては到底不可能であるからである、昔からの佛教經典も此點からいへば實に一大藝術品である。實に無韻の詩であつて、之を藝術品として考へて始めて此に眞意が味はれるのでなからうか。

### 三

古來佛教と藝術とは果して如何なる關係に立つて居たか。世の學者は往々佛教と藝術との古代甚

だ疎遠なるを説き、彼のガンダラ (Gandhara) 美術なるものが西方より傳來しない以前少くとも阿育王時代以前には佛教に藝術といふものはなく又極めて藝術に對して冷淡であつたやうである。で寶積經の中にも現世惡事を行ずれば來世には工巧の家に生るとある。かくの如く工巧なるものが極めて擯斥の意味に用ゐられて居る以上、藝術を尊重する抔といふ念のあるべき筈はないではなからうかといふ。然し工巧は必ずしも美術家ではない、細工人である。artistではなくして artisan である。印度の階級制度の上から言つて下等な社會である。今いふ所もその意味で言つたとみる方が正しいのである。又いふ、五分律の中にも比丘尼が王の宮殿及び畫舎を觀、又諸嬉戲の處を遊觀するを禁せられてある。この畫舎とは美術館であるから、佛教では元來藝術を尊重するといふことはないのである。併しながらこれも如何かと思ふ

此に畫舎といふのは勿論美術館ではない、壁畫杯をかいた家のことである。國王や貴顯の住する處には多く壁畫をかいたことは古來印度には珍しくないで Rāmāyana といふ彼有名な印度の物語にも壁畫のことが書いてある。今比丘尼に宮殿や畫舎を見ることを禁せられたのも藝術を貶したのでなくて、たゞ斯くの如きものゝみを見歩いて肝心な修行を怠ることの宜しからざるを誡められたものであらう。印度では寧ろ美術家を尊重したものである。阿育王の祖父旃多 (Candragupta) 王の時代に希臘から使節として來たメガステネースの書いた『印度』といふ見聞録にも美術家の手を傷害したものは一般の場合よりも重刑に處せらるるといふことが見えて居る。それを見ても當時既に美術家が如何に世人から尊敬せられて居たかといふことが判る。社會がかくの如くなれば佛教者にしても必ずや之を尊敬したであらう。少くとも之

を賤すべき理由は秋毫もないのである。のみならず、かの祇園精舎が出来上るや之に書を描かんことを佛に願つた。佛は容易く之を許し、剩へ何處

には何の書をかけとまで命せられた。即ち門には杖を手にした夜叉神を書け、其傍には神通變化の狀を、簷下には佛の本生事を書け、講堂には佛説法の圖を書け、食堂には持餅夜叉の圖、病室には如來の親しく看病したまふ圖、大小便所には死屍の恐るべき狀、房内には白骨を書けといふ様に委細に題目迄も指示せられてある。此に夜叉とは寺門を護るものであり、白骨をかいたのは其内に入つて自然に觀法を行するやうなさしむる爲であらう。其他皆それ／＼意味がある。これによつてみると古代の大伽藍には講堂より大小便所に至るまで壁畫をかいたことが推察される、勿論當時の一般社會が其家に壁畫を以て裝飾する習慣があつたから、寺院にも殊に佛敎的意味の含まれた畫をか

かれたことはいふ迄もない。だから佛敎は始めより決して藝術に冷淡にして之を無視する如きことはなかつたものである。

殊に阿育王前後よりは現にその遺物の殘つて居るものも少からずある。而して其中には實に微妙精巧驚くべきものがある。だから阿育王時代には盛んに佛敎の藝術的作品を造つて居つたことは疑ないのである。阿育王以前には材料が多く木材であつたから現存する遺物もないが、之によつて佛敎は藝術を伴はなかつた宗教だと思ふのは大なる誤といふべきである。阿育王時代前後には其記念柱を始めとしブダガヤ (Buddhaga) の塔やバルフト (Barhut) やサーンチー (Sanchi) の塔の玉垣に於ける彫刻等がある。更らに降つては犍陀羅の美術があり、而して犍多期に至つては印度の佛敎美術は實に世界に冠たるものを生じた。これらは皆造形美術であつて、この外にも今は實物について見

ることは出来ないが澤山にかゝる藝術品が造られたことであらうと思ふ。造形美術でない方面に於ても、例へば法句經の如き全く短い詩集である。又本生經の如きも散文の物語で終りに教訓的な詩が附せられてある。かゝるものが盛んに一般に讀まれたものである。俗間に佛敎の趣味が弘まつたのも、亦是のみとはいはれないが、主として斯かる文學的のものが顯はれたからである。言ふまでもなく大乘の經典は何れもみな詩的である。散文的な詩である。又小乘經典といへども佛の說法の中、面白いと思はれる處は皆詩的である。文字以外にあるものを味はせられるのである。故に佛敎經典は皆詩的だと考へて差支ない。で佛敎には殊に藝術を推稱し又は之を奨勵した所もないが、佛敎そのものが一大藝術で、それに伴つて造形美術でも色々なものが出來たのである。而して俗間に於ては高尚な教義よりも寧ろかゝる文學的經典を

讀むか若くは形の上に顯はされて居る、造形美術によつて感化されたことの一層大なるものがある。と信する。だから古代佛敎では特に藝術を推奨して局らず、又其遺品も現存するもの、少いからとついで、決して之を無視したとは斷言出來ぬ。

#### 四

更らに佛敎の盛衰と藝術の消長とを比較してみれば一層此事が明になる。日本や支那に於ても同様であるが今姑らく印度に於ける此等兩者關係の概要を述べてみよう。佛在世の時代は前述の如くであるが、佛滅後阿育王前後は實に佛敎の黃金時代であつて、遠く海外の希臘、埃及にまで布敎傳道の路を開き古今未曾有の大事業を成した。その時代に於ける藝術は今現存する佛敎の藝術中最古のものも亦最も偉大なものである。後世にも多くの佛敎藝術が現れて居るが、古拙にして而も雄大な



氣分を顯はすものとして吾人は先づ阿育王時代のものを推さなければならぬ。前にも一言したブダガヤの塔や、バルフートの玉垣や阿育王柱の獅子像の如きは實に世界の逸品と稱して差支ない。かゝる藝術が當時製作せらるゝには無論その時代の人間が佛敎の感化を受け、佛敎的氣分に涵養せられて居なければならぬのである。で今日その遺品をみて當時の佛敎が如何に盛であつたかを知ることも出来る。その後紀元前後に起つたガンダラ(Gandhara)の藝術は希臘から入來つたもので印度美術の正系ではないが、當時は所謂月支王朝の勃興した時で迦膩色迦王の如き佛敎の大保護者が顯はれ、西北印度に於ては阿育王以後佛敎の最も盛となつた時であるから、此に印度の藝術史上にも一時期を劃するに至つたものである。それから第三期グプタ(Gupta)王朝(300-600 A. D.)時代には又多く世界的の彫刻が製作せられた。此時代の

初めの國王は佛敎に甚だ冷淡であつたにも拘らず社會は多年布敎の結果全然佛敎的であつた。その事は當時の渡印僧法顯三藏のかいた佛國記を見ても明かである。法顯は印度の社會状態を述べていふ、舉國の人悉く生物を殺さず、酒を飲まず、葱蒜を食せず、又國中には賭鶏を養はず、生口を賣らず、屠店及び酒を沾るものなく、たゞCandariaの漁獵し肉を賣るのみ。故にCandariaを名けて惡人とすとあるによつても當時中印の社會が如何に佛敎化してゐたか判る。又摩揭陁國の状態を記してはいふ、國中の長者居士は各城内に於て福德醫藥舍を建つ。凡そ國中の貧窮孤獨殘跛一切の病人は皆此の舍に詣で種々供給せられ醫師病を看宜しきに隨ひ飲食及び湯藥皆安を得せしむ、癒ゆるものは自ら去るとある。阿育王の社會政策の餘勢の今猶は存して居るを見るべきである。尙直接佛敎に關しては恒河已西の諸國王は皆驚く佛法を信

じ衆僧を供養し王の天冠を脱して自から行食す、佛在世の時の諸王供養の法式相傳へて今に至るとある。又諸國王長者居士衆僧の爲めに精舎を起し田宅民戸牛犢等を供養し、後の王々相傳へて廢する事なく、僧の坊舎に止住するものは飲食衣服すべて缺乏することなし、處々皆然りともいふ。恒河以西の地如何に佛教が盛であつたかわかる。印度は元來國王が中心となり、國民は之に倣ふのであるが、宗教だけは例外で、國民が如何なる宗教を信じやうと國王は之に干渉することを得ない干渉すれば國民は離散してしまふ恐があるからである。それでこの時代も國王はあまり佛教に熱心ではなかつたが、民は盛に佛教を信奉したものである。御存じの如くこの Gupta 王朝時代は、大乘佛教の勃興した時である。大乘佛教の興起と共に小乘に於ても種々なる學者が輩出した。そしてこれらの學者達は議論に於ては幽遠な教理を説いて

居るが、又一方佛法を讚嘆する偈頌が盛に行はれた。俗間に於ては六ヶ敷い議論は少數者の耳にし加入らず、寧ろ此等の偈頌が専ら行はれたのである。之と同時に造形美術の方でも實に前後無比の大作が澤山に顯はれて居る。現に中印度から發掘されたる此王朝の美術品は實に立派なものである彼有名なるアジャンター (Ajanta) の壁畫も亦この王朝の末期に出來たものである。錫崙のシギリアの壁畫も四百年代のもので矢張りこの王朝の盛んな時代に出來たのである。而して偈頌の製作が此等造形美術と殆んど前後して顯はれ來つたのも決して偶然ではなからう。唐の義淨三藏の南海寄歸傳中にこのことが書いてある。「神州之地自古相傳但知禮佛題名多不稱揚讚德如西方制底畔睇及常途禮敬、每於晡後或曠黃時、大衆出門繞塔三市、香華具設、並悉蹲踞、令其能者作哀雅聲、明徹雄朗讚大師德」といふ。その禮讚文

の主なるものとしては摩陁里制吒マトリヂエトの四百讚及び一百五十讚を擧げて居る。そして其文章を批評して『文情婉麗共天鶴而齊芳、理致清高與地嶽而爭峻、西方造讚頌者莫不咸同祖習、無著世親菩薩悉皆仰趾、故五天之地初出家者亦既誦得五戒十戒、卽須先敎誦斯二讚、無問大乘小乘』といつて次に義淨は讚頌についての功德の六種あることを述べて居る。一能知佛徳之深遠。二體制文之次第。三令舌根清淨。四得胸藏開通。五則處衆不惶。六乃長命無病と。かく讚頌を稱揚して居る。又義淨は當時龍樹が詩を以て書に代へ檀越南嶠薩羅國王に送つた密友書のことを述べて居る。藏經中に所謂勸誡王頌は卽ちこれである。是れは中論や智度論杯と違つて、極めて平易な道徳的の説を述べたものである。流石は龍樹の龍樹たる所である。義淨は之を評して『文藻秀發、慰誨勤勤、的指中途、親逾骨肉、就中旨趣、寔有

有意』といつて居る。そして『五天創學之流、皆先誦此書讚、掃心繫仰之類、靡不研味終身、若神州法侶誦觀音遺敎、俗徒讀千文孝經矣、莫不欽翫用爲師範』と記してある。又之と同類のものとしては祖得迦摩羅ジツタカマラを擧げ、『方知讚詠之中斯爲美極』といつてある。又馬鳴も歌詞及莊嚴論並びに佛本行詩を造るといひ、又『五天南海無不誦誦』と傳へて居る。此等は印度佛敎に關する個頌の最も優秀なるものであらうが、何れも皆遼多王朝前後のものである。かくて此數百年の間は造形美術に於て前後無比の大作を遺したと同時に詩歌の方でも古今第一流の人々が一代の精力を竭くして佛讚徳の詩に筆を執り之によつて以て人を感化したのである。一般に手廣く佛敎が社會に理解せられたのは六ヶしい議論の方面からでなく、形にあらはれてゐる藝術又は詩歌の方面であらう。この王朝が衰へてから

印度には藝術的作品の殆んどみるに足るものはない。之によつてみると佛教の盛なりし時代には藝術も勃興し、藝術なき時代は佛教も亦衰へた時である。これは相互に因となり果となつたのだらうと思はれる。

日本や支那に就ていふも亦同じである。概して之をいへば宗教の盛なる時其藝術も亦盛であり、宗教藝術の衰へたる時には其宗教も亦衰へて居ることは争はれぬ事實である。宗教と藝術との間には極めて密接な關係があり、到底之を分離し得ないのである。勿論宗教に於ける古來の大作は何れも作者の信仰から流れ出で、其形式を成したもので、必らずしも之によつて人を感化しやうといふ考はなかつたに相違ない、併しながら己れの堅い信念から自然に流出したものであるから、自からそこに生々した信仰が現れ、それが又不知不識の間に他人を感化し信仰に引入れるに至るのは必然の結果である、で布教の點からいつても宗教藝術は實に重大なる關係を有するものである。

所で現在の佛教界を通覽すれば、此點に於ても

甚だしき缺陷を有し實に遺憾極まるものがあるといはねばならぬ。造形美術の方面でも明治以來殆んど何等見るに足るものがない。近頃は印度風や佛教的の彫刻繪畫で作られないではないが、極めて不完全である。詩歌の方面でも、やはりこれといつて立派な作品がない様に思はれる。建築の方面にも自然と莊嚴な感にうたれる様なものはまだ顯はれない様である。斯く佛教界に於ける藝術的作品の殆んど全く顯はれざるのは甚だなげかほしい事であると思ふ。これはやがて宗教信仰の盛でない半面を示すものではなからうか。

何れにしても 治大正の政治上では古今未曾有の時期に際し、未だ此時代の宗教信念を顯示するに足る何等の藝術を有せざるは、實に遺憾のことといはなければならぬ。

偶海外の状態を視察し來り顧みて母國の佛教と其藝術とに思を致せば轉寂寥の感に堪へないので此に一言を敢てしたのである。

(以上、九、四、二五、本會第一回公開講演)